

過疎化が進行する農村集落を維持するための将来地区構想
—兵庫県淡路市尾崎東集落を対象として—

21919016 梶原 凜
指導教員 葉袋 奈美子教授

過疎地域	移住	新規就農
観光開発	交通	パーク&ライド

1. 研究の背景・目的・方法

近年は農業衰退による過疎地を、観光地化して問題解決を図る地域もある。観光による交流人口の増加は、定住人口の減少分の経済効果を補うが、多くの観光客を迎えることで住民の生活環境に影響がでることもある。また、過疎地域の観光開発は周辺の農村集落の自然環境を脅かす危険性もある。

本研究の目的は、兵庫県淡路市尾崎に位置する尾崎東集落を対象地とし、尾崎東集落の現状把握と農村集落を維持する可能性の提案である。

研究手法は、尾崎への移住者5名、地域住民7名の計12名のヒアリング調査である。

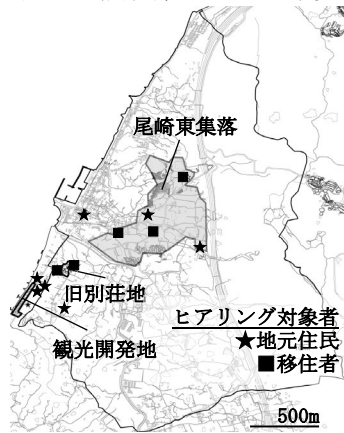


図1 尾崎東集落の位置

2. 尾崎の実態

2-1 農家の新しい在り方

尾崎東集落は淡路島の中央部西海岸に位置し、神戸市内まで車で40分程度である。淡路市一宮地区にあり、集落戸数73戸の内、農家30戸、高齢化率42%、耕地面積18.8haの小規模集落である。¹⁾

尾崎東集落では、2012年から担い手育成のために新規就農者の受け入れを開始した。以降、移住者は徐々に増えており、島外への人口流出により引継ぎ手不足となっていた農地を新規就農者が利用することで、農地を耕作放棄地にせず集落を維持し続けていることがヒアリングより明らかになった。図2に示すように、新規就農者同士が協働して、それぞれが栽培した作物を卸して、販売を委託する会社を設立し、JAに依存しない販売システムを構築している。珍しい野菜を育てることで神戸市内のレストラン等への直送を行い安定した収益を確保している。出荷に便利な場所に立地し、農地を地元農家から借りたり、買い上げている。自社生産は、地元住民や新規就農者を雇用し、会社内で農業や販売法を学ぶ機会にもなっている。働き方を企業従事風に時間を管理することで、従来の農村生活スタイルとは異なるが、都市部での

生活との変化を少なくすることで、移住の持続性を高めている。自ら販売、就農支援、観光農園の支援などを行うことが、新しい農家の在り方として定着している。

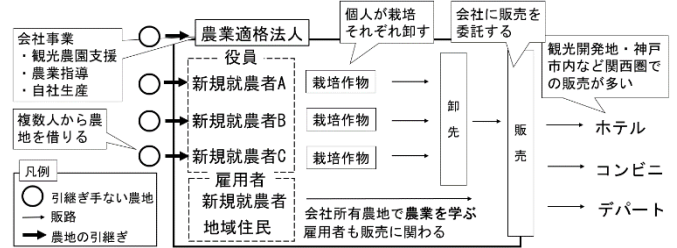


図2 新しい農家の在り方

2-2 観光開発による変化

2019年以降、周辺地域の観光開発により交通量が増加し、農家の出荷に影響が出ている。また、その周辺で暮らす地元住民は、休日の車の出し入れに苦労したり、騒音に悩まされている。一方、観光をきっかけに移住する移住者の増加、農家の栽培作物が観光開発地の飲食店で利用されるといった地域内循環も起こっている。

3. Agri Schoolの提案

農家の新しい在り方を集落全体に反映させ、人口の減少が著しい集落を維持し、現在抱える交通量の課題を解決するため将来地区構想が必要である。

農業に関心をもった人が、新規就農後に地域に馴染みやすく、十分な農業教育を受け失敗を減らす Agri School で移住者を受け入れる集落計画の提案を行う。(図3)

交通課題解決法としてパーク&ライドを実施し、地域住民や農家の活動時間に合わせて道路に交通規制をかけ、地域住民と観光客の基本的な動線を分ける。その上で、観光農園での農業体験、生産物を観光拠点の店舗に運送する等、観光客と地元農家の動線の交わりを設ける。更に新規就農者は Agri School で技術を得ると同時に、小規模な農地借用から初めて時代に独立した農家となるために、集落の中央部の農地を次第に借用し、耕作面積を広げ安定した収入を得ると同時に、住民として地域の一員としての暮らしを確立する。新しい農家生活スタイルを確立しながら、Agri Schoolのある農村集落が形成される。

【参考文献】

1) 兵庫県淡路県民局北淡路農業改良普及センターより資料提供

